

「伊藤 毅生誕 100 年記念コンサート」開催される。

1918 年 5 月 3 日は私の恩師伊藤毅先生の生誕日。これを記念して 100 年後の 2018 年 5 月 3 日「伊藤 毅生誕 100 年記念コンサート」がトッパンホールで開かれた。午前中の雨もあがりコンサート日和になった。

(コンサートのご案内は EWE ウェブニュース NO. 286 (2018-1-26) でお知らせしています)

先生は音響学の権威として知られていたが、実は音楽一家だ。著名な作曲家の諸井三郎先生の内弟子になられたぐらいで、ピアノ曲をいくつも作曲している。伊藤先生の御長女、堀内久世さんはピアニスト、先生の御従兄弟さんは日本を代表するジャズピアニスト山下洋輔さんだ。

今回の記念演奏会はこのお二人が出演して開催された。会場には白井前総長はじめ多くの方にご来場いただいた。有難うございました。

以下に演奏会の模様を報告する。

最初の曲はバッハ：パルティータ第 4 番 BWV828 (ピアノ：堀内久世)

静まりかえった会場に久世さんの最初の手が下される。この瞬間、久世さんはお父様の伊藤毅先生にどんな思いを浮かべたのだろうか。演奏会後の懇親会の挨拶で白井前総長は演奏を「清楚なバッハ」と表現されていた。この曲はもともと、クラヴィコードのために書かれた曲だが冒頭の部分は細かい装飾音の連続で、いかにもバッハらしい。久世さんの演奏がマッチして、バロックの幽玄の世界に誘われた。緊張感がこちらにも伝わってきた。

2 曲目は伊藤先生が愛したベートーベンのピアノソナタ第 7 番から第 3 楽章と第 4 楽章。(ピアノ：堀内久世)

ベートーベンにしては珍しくロマンチックな曲。しかし最後は堰を切ったような情熱的ロマンチズムが会場に溢れた。

第 1 部最後は伊藤先生作曲のピアノソナタ第 3 番 変ホ短調 (ピアノ：堀内久世)

短調でありながら会場に優雅な雰囲気漂う。久世さんはプログラムの曲目解説で「譜面が音符で埋め尽くされるほどの難曲」と紹介している。それをさらりと弾いてしまうのだから驚く。伊藤先生との思い出が頭の中をよぎる。前述の白井前総長は日本的な音階と評していた。伊藤先生はこの曲に「何故」変ホ短調を選んだのだろうか。伊藤先生が愛したベートーベンもピアノソナタでは変ホ短調の曲は書いていない。もしかしたら少し日本的なメロディーを変ホ短調で奏でることでベートーベンを超えようとしたのかもしれない。

休憩を挟んで第 2 部は伊藤先生の御従兄弟さんであり日本を代表するピアニスト山下洋輔さんとのピアノ連弾で始まった。

第 2 部の 1 曲目は伊藤先生作曲の練習曲ロ短調 Op. 5-1 (ピアノ連弾：堀内久世/山下洋輔)

久世さんが低音で刻むリズムに乗せて山下さんの右手が高音の初めの一音を弾くと、がらりと雰囲気が変わった。ピアノの音がまるでブルースハーモニカの様だ。

久世さんが正確にリズムを刻む。それを無視したいのを我慢して洋輔さんも呼応する。途中からはアドリブも入って山下洋輔ワールドだ。見事なアンサンブル。

第2曲はプーランクの4手のためのソナタ。(ピアノ連弾：堀内久世/山下洋輔) これも山下さんが高音部を受け持つ。ここからはアドリブ全開だ。

そして第3曲は山下さん得意の「キアズマ」(ピアノ連弾：堀内久世/山下洋輔)

山下さんがスタインウェイのピアノが壊れるほど激しく肘打ち奏法で演奏すると、つられて久世さんも見事な肘打ちでピアノを奏す。二人の圧倒的なパワーに私の頭脳が破壊された。

アンコールではラベルのボレロ (ピアノ：山下洋輔) をモチーフに見事なジャズアレンジ。そして今までの激しい音楽から一転してシューマンの子供の情景「異国の人々」(ピアノ：堀内久世)、最後は伊藤先生生誕の1918年に因んで同年に発表された「赤い鳥小鳥」(ピアノ連弾：堀内久世/山下洋輔) が演奏された。

会場には感動の嵐が吹き荒れた。

「伊藤 毅生誕100年記念コンサート」にふさわしい心に残る一日となった。

演奏会後の懇親会は久世さん山下さんも参加して同じ会場のレストランで開かれた。楽しい思い出話に花が咲き、さながら合同クラス会となった。

記：S41年電通 吉野武彦